

今、教育委員は！

平成29年3月
教育委員 青柳 淳

～～子どもたちは未来を創造する～～

【高校再編について】

昨年10月、第2期高校再編をめぐって、長野県教育委員会から新しい方針が示されました。「学びの改革 基本構想（案）」です。

少子化の進行の中で、高校の活力を維持し、多様な教育課程を確保するためには、第2期の高校再編統合は、いま勇気をもって踏み出さなければならない喫緊の課題だと思います。

佐久地区の中学卒業生数は、平成40年には1,640人程度になると見込まれます。現在と比較すると、約400人も減ります。佐久地区には高校が公立10校と私立2校（ISAKは国際的募集のため除きます）があります。1,640人が12校に均等に進学すると仮定すると、1校当たり137人になります。佐久地区では、流入より上小地区などへの流出が多くなりますので、1校当たり1学年120人3学級程度になるという予測が成り立ちます。

交通の利便性、適正な高校配置といった観点から、1学年120人3学級規模の地域高校が存在することを否定するものではありません。しかし、すべての高校が1学年3学級となってしまうということは、生徒たちの多様な学びの欲求、高校の個性の発揮、様々な進路に向けての高校選択といった観点から、好ましいものではないと考えます。

高校には、ある程度の規模が必要だとの議論は、限られた紙幅で踏み込むと、乱暴な議論になってしまいますので、これ以上触れません。

高校の再編統合が、新しい高校の可能性を創出するということは、第1期高校再編によって成立した2校が証明していると思います。

第1期高校再編で装いを新たにした佐久平総合技術高校も岩村田高校も、新たな発展の道を歩んでいます。

佐久平総合技術高校は、北佐久農業高校・臼田高校・岩村田高校工業科が統合して、新たに発足しました。1学年7学級、佐久地区最大の公立高校となりました。キャリア教育、多彩な実習授業、研究成果の発表会、小学生との交流、各種職業系コンテストでの成果、クラブ活動の躍進など、日に日に存在感を高めています。

岩村田高校は、工業科を分離して、普通科だけの高校となりました。旧制岩村田中学の流れに戻したといえるかと思います。被災地支援活動、自主活動での多校生との交流、進学実績の向上などにより、以前よりさらに魅力を増しています。

第2期高校再編に臨むにあたり、まず、考えてほしいことは、21世紀を担う生徒たちにとって、どのような高校が必要かということです。現在の高校の多くの起源は、旧制中等教育学校にあります。20世紀初頭に、旧制中学校、商業学校、農業学校をつくったとき、当時の佐久の人々は、これからの時代を担う人材を育成するには、どういう学校が必要かという観点から、各校をつくっていったものと思います。その地点が原点です。生徒にとってどういう高校が必要かという原点に立って、佐久地区の高校教育を考えていきたいものです。

【教育委員会の動きなど】

1 ジュニアリーダー研修と中学生海外研修

1月28日（土）に、野沢会館でジュニアリーダー研修修了式が行われました。参加した子どもたちが、順次、望月少年自然の家宿泊研修、野沢山門市商業体験、そば打ち体験、河川敷ゴミ拾い、東京見学、シルバーランドみつ交流など、この一年の活動を発表しました。



研修生代表は、東京見学を取り上げ、「ユニセフハウスでの学習や国会見学を通して、世界の困っている子どもたちをどうやって救うかを考えました。これまでに体験してきたこと、学んだことを、これからの生活に生かしていきたいと思います。」と、まとめの言葉を述べました。

また、昨年9月に、アメリカ・モンゴルでの中学生海外研修の発表会が行われ、この1月に、それを踏まえた中学生海外研修報告書が、冊子として発行されました。こんな記述があります。「モンゴル語…という点はちょっと置いておいて、身ぶり、手ぶりで伝えることも何度かやりました。それも外国の方とコミュニケーションをとる一つの方法なので今回、やることができ良かったと思います」。異国の地での不思議な経験、新しい体験、交流することの楽しさなどが、たくさん載っています。

海外研修参加者の中には、ジュニアリーダー研修を経験した子も何人かいるわけですが、小学生から中学生へと、体験的な研修を通して成長していることを見て取ることができます。ジュニアリーダー研修・中学生海外研修は、様々な体験活動を通じて、子どもたちの活動の幅を広げ、挑戦への意欲を引き出し、学校、更には国を超えた子どもたち同士の交流を生み出しています。

2 短詩型文学祭

2月4日、市民創錬センターで、第12回短詩型文学祭が行われました。午後には、武田徹氏の記念公演がありました。児童・生徒の特選作品が表彰されました。私は、展示された特選の俳句・短歌・川柳・詩を鑑賞しました。

子どもたちは、すなおで率直な感性をそのまま表現します。表現が技巧的でなくても、目の前にあるものごとを、直接的、鋭敏に受け止めています。大人にない率直さや感覚の鋭さを感じることができます。俳句を二つばかり紹介します。

足元の 水たまりにも 虹映る 泉小学校 6年 木村 立真 君
虫くいから 青空みえた さくらはは 高瀬小学校2年 佐藤 琴音 さん

木村君は、足元の水たまりに映る虹に着目し、生き生きした生活、明るい未来への希望を描き出してくれます。佐藤さんは、見上げた時思わず目にした、桜の葉の虫食いの穴、その向こうに見える青空、一瞬の驚きをみごとにとらえています。

一般の方も含めて、短詩型文学に親しむ人が、より多くなっていくことを願っています。

3 太鼓の共演（佐久市文化事業団の行事）

市内の太鼓演奏4団体による演奏会が行われました。2月5日（日）午後、浅科穂の香ホールは観客でいっぱいになりました。



中山道宿場太鼓保存会、佐久鯉太鼓保存会、臼田小満太鼓愛好会、信州望月太鼓の皆さんがそれぞれ演奏し、最後に合同演奏が行われました。その中で中山道宿場太鼓保存会を取り上げてみます。

平成2年に結成されてから27年になります。中学校の授業での指導がきっかけで、はじめは、メンバーがほとんど中・高・大の学生ばかりだったそうです。最近では、彼らが社会人となって保存会に戻り演奏の牽引力となっています。

その演奏には、若者の持つ爆発的なエネルギーを感じさせられました。単に受け継がれてきたものを繰り返すだけではなく、新しい音を創造しようとするチャレンジ精神を感じさせられました。

伝統芸能が継承されていく中で、そこに若いエネルギーが注ぎ込まれ、新しい音・躍動的なリズムが創造されていきます。その様子を目の当たりにすることができました。